平城京左京三条一坊一・二坪の調査（平城第495次）

朱雀門の南東、朱雀大路に面する一角は、調査前には朱雀大路緑地と呼ばれる緑地公園として利用されていました。平城京の条坊では左京三条一坊一坪にあたり、これまでの調査により坪を囲う築地塀が存在しない特殊な性格の坪として指摘されていました。

ここに国土交通省によって平城宮跡展示館（仮称）の建設が計画され、2010年度から都城発掘調査部が継続的に発掘調査をおこなっています。これまでの調査によって、奈良時代前半には一坪の北側で鉄鍛冶工房が営まれていたことが判明しました。また、奈良時代後半には鉄鍛冶工房区域は整地され広場のような利用がなされたと想定されています。そのほかにも大型の井戸や多くの掘立柱建物、一坪を南北に二分する坪内道路等を検出しています。

今回の調査の目的は鉄鍛冶工房群の範囲の確認と、一坪と二坪の境界部分の様相の解明でした。そのため南北２カ所の調査区を設定しました。北調査区の面積は693㎡、南調査区の面積は1,152㎡です。調査期間は2012年６月25日から10月16日までした。

北調査区では新たに１棟の鉄鍛冶工房を検出しました。これにより朱雀門のすぐそばにまで工房区域がおよんでいたことが判明し、この地区での鉄鍛冶工房の広がりの全貌がほぼあきらかとなりました。

鉄鍛冶工房の遺存状態はそれほど良くありませんでしたが、27基の鍛冶炉を検出しました。また、鍛冶炉に風を送る装置であるふいごや、熱した鉄を敲（たた）く台である金床石（かなとこいし）を据え付けるための穴等も多数検出しています。

鉄鍛冶工房は庇（ひさし）を持つ掘立柱建物で覆われていました。工房建物の東と南には掘立柱塀が建てられており、工房を区画する施設の様相もあきらかとなりました。昨年度の調査とあわせて、炉の構造やふいご・金床石との位置関係、複数の鉄鍛冶工房と区画施設・排水施設等の配置方式の全貌があきかとなり、古代の鉄鍛冶工房の実態を知る上で、きわめて重要な発見となりました。

工房の廃棄物の出土量や鍛冶炉の作り直しの状況から、鉄鍛冶工房の操業期間は比較的短いと考えられ、奈良時代後半までには工房区域は整地されています。工房で生産していた製品は今回は出土しておらず、何を作っていたかは確定できませんでした。

南調査区では左京三条一坊一坪と二坪を区切る東西道路である三条条間北小路とその北側溝・南側溝を検出しました。三条条間北小路の路面幅は約５ｍで、その南北に幅約1.5ｍの側溝がともないます。北側溝・南側溝に堆積していた土や含まれていた遺物から、どちらも奈良時代後半まできちんと手入れがなされ、機能していたことが判明しています。

先に述べたように、一坪の周囲には築地塀等の区画施設が存在しないことが指摘されていました。今回の調査によっても雨落溝等の痕跡を一切確認できなかったことから、一坪には周囲の区画施設が存在していなかったとみられます。

一坪の南側の二坪については残念ながら築地塀の版築の痕跡は確認できませんでした。しかし、築地塀の存在が想定される位置では足場穴や築地塀の添柱穴の可能性がある多数の穴を検出しました。また、築地塀想定位置付近では大量の瓦片が出土しています。これらのことから、二坪北面には本来築地塀が存在していたものと考えられます。

今回の調査地は平城宮の正門である朱雀門に隣接する場所で、まさに当時の一等地でした。その具体像があきらかになってきたことは、平城京の実像を解明する上で大きな意味をもつといえます。

（都城発掘調査部　川畑 純）

北調査区の全景（南から）　左半の一画が工房

南調査区の全景（南西から）　手前中央は復元築地塀